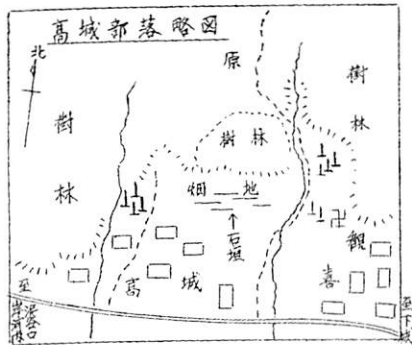


研究

堅田 高城 を たずねて

— 佐伯氏の居館跡をさぐる —

会員 岩 田 善 市



佐伯荘に於ける初期の佐伯氏居館はどこであつたか、代々榊牟礼城に在りとは考えられない。この事については、また誰もが解明してない深い霧に包まれた歴史で、私など取りつく島もないといつた問題であるが、唯足はまかせて、佐伯氏居館の跡と云い伝えられてゐる上堅田上城の、高城部落をたずねてみた。

中山トンネルをぬけると、上堅田小学校前に出る。そこから西に一直線に進むと、高城山の麓の飯喜部落につく。この部落と境も分らぬように隣り合ひ、五、六軒の住居のあるのが高城で、別に取り分けて目やすになるようなものは何もない。昔は多くの人家があつたであらうが、今はさびれた田舎のたぐさまいである。

私は再三この地を訪れ、何か手がかりになるようなものはなかつた。土地の人にも聞いてみたが、この附近一帯は高城と云うのみで、小字もなかつた。無論ここが城跡ですと云う場所も判明しない。

郷土史の大家故佐藤蔵太郎氏によると

「高城山は上堅田村旧称城村の内字高城にあり、山勢

巖城として翠巒屏と連ぬるが如く、番立川の長流其麓をめぐり、宇山城塞其の南に峙ち、田野遠く開けて一望雄偉の境域たり。之れ佐伯氏世々此山腹に館し、士を養ひ兵を蓄え、豊州南疆の鎮として威武並四隣に輝かせし当年の城市たりしなり。乃ち城村高城の称今尚地名を存在する所以なり。」

と云い、高城山の三合目位に原(はら)と呼ばれる平地があつたが、洪水に流されて元の状態はないが、此所の城跡であると云つておられた。

かつて佐伯中学校の教鞭を取られた古庄先生は「鎌倉時代に日未だ山城を築く事は少なかつた。従つて平地に其の居館の遺跡を索めなくてはならない。我が国では山城を築くに至つたのは元仁の大乱以後のことである。して見れば、緒方三郎以後数代の居館は、三面山に囲まれたる上城の部落ではあるまいか。

地形では武家居館の第一の型にピッタリと符合する。背後の山は険に、前面に田地よく開けて、相江の港に通じ、大地主即ち武士たりし当時の佐伯氏の居館として見、けたし最適の地形にて、尚城村、上城等の地名の伝わる等より考え見れば、鎌倉時代の居館は上城の地にあつたものと思われる。」

とあるところから考えると、二人とも同一見解で居館をこの高城の地と考へられてゐられる。とすれど「原」と云う所はどこであらうか、何か伝説でもあれはしないかと、土地の人に聞いてみたが、それが又一こゝにわからぬ。百年前の事ですら分らぬ世の中、何百年前の事だ。聞くより足で歩いてみよう、二度高城山の中腹まで登つてみた。鼻道から遠望すれば高城の背後は、谷と谷との中間に原らしい平地がある様に見えるが、現地に登つてみれば斜面になつていて、居館の跡らしい平地は見つ

からない。當時の城（居館）は要害の地の中腹、又は麓を利用して築き、万一の場合に背後の山に立籠るのであるから、中腹にだければ麓を採せと思ひ、幸い知人があるので聞いてみた。

と云ふが「上の原」と云う平原があることがあつた。「あすこですよ」と云う。住家のすや上に植林されたばかりの四山が見える。

山に登るのは容易であつた。何百年の星霜を怒る間に、地形の変化が急激に進む事はあり得る。当時平地であつたとして館を建てた事を考へてみた。

広さは充分とはいへないが、館の敷地としてはいい所である。岡の上に立つて居館を想像しながら周囲を見廻した。

前面には堅田平野が開け、背後には高城山が峻々として天を突く。なる程良い地形であるが、家采の居屋敷も必要だ、とあたりを調べてみた。屋敷とするに適當な平地がいくらも見つかる。しかもこの岡との続きに石垣で築いた広い段々畑が幾段もある。もしこれを利用すればこの一帯には莫大の居館の遺蹟が出来ると思われる。

この地を城跡と想定して、水を求めてみた。きけば如何なる旱天にも絶対に分れたことがないという谷川が近くを流れている。今では近くの人家の水道の源となつてゐる。更に水について、高城山麓城の用意は、四合目位の山の中腹に、深さ二十メートルばかりの空井戸が掘られてゐる。村の人は不思議な穴だと云つてゐるが、雨水の立孔であつたと思われる。

さて、次に要害について一言しなければならぬ。西方の背後は高城山（三〇〇米）、北と南は山地で自然の守りとなつてゐる。東前面は平地が開ける堅田平野であるが、昔大越川の支流は高城の前面を横切り、天越方面へ流れ

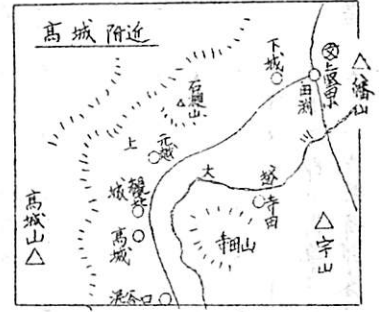
たものが山に沿つて八幡山の下の流れ出ていたと云う。そのすると、川が一ツの防衛帯となる。然し川ありとは云ふ平野が開け、栢江の入江はつくづく。ここを突かれて敵前上陸を受ければ、容易に攻め込まれる心配がある。その押さえには築いたのが、宇山城と城八幡山であると思ふ。この二城については、かつて佐伯史談に發表したかて畧するが、高城居館は城村全体から見れば奥深い所にある。

そこで今一つ、外敵の見張所が必要になる。私はこの地を求めてみた。以前から見張所ではあるまいかと思つた山々が四峯ある。(1)岸河内の出目嶽、(2)同金山羅様、(3)寺田の虚空蔵様、(4)城村の石榎山。

生目嶽は高さ二〇〇米、岸河内上屋の上の台の下を通り、谷を渡れば登山道になる。急坂を登る。遠く堅田平野や佐伯湾を眺望しながら頂上へ行く。広い平地があり、生目嶽を祀る堂がある。眼痛の神として庶民の信仰が厚いとみえて、幟、人形等が献納されてゐる。展望すれば大越の谷々山々が手に取る程に見える。眼下には堅田合戦で知られた鬼が瀬が見える。大越、赤木方面よりの侵入に對する物見の場所として最適である。

金山羅様現は高さ約一〇〇米、岸河内鍛冶屋部落より登山する。頂上に平地があり、石の祠に祀られてゐる。海に面した下堅田佐土原から登山すればいいものを、航海の神を祀るに海は遠い岸河内の方が登るのはおがしい話であるが、かつて佐伯氏に水軍があり、その航海の安全と武運長久を祈願したものと考へればなるほどと領ける。頂上に立てば、大江灘の沖はるか四國の山々まで見はるかす、右は堅田の奥、左は中山峠と、広い視野をもつ、物見台として適地である。

次に寺田山の虚空蔵様は、高さ一二五米である。寺田



村の背後にあつて、ここから登山すればいいものを、わざわざ高城の川向から登山道が出来てゐる。

登れば高城を足下に見下し、いざ鎌倉と云う時は、居館に連絡するに足叫ぶもよし、手まねでもよしと云つた地形。山上には東西十五六米、南北八九米の平地があり、虚空蔵菩薩をお祀りしてある。菩薩は蓮華の座にすわり、頭には五仏宝冠をかき、右手は印を結ぶ、左手は如意宝珠を持たれ、静かに何かを思索するようになつてゐる。男の子の菩薩である。この仏の智恵は広大無辺、また無量の功徳を蔵すること虚空の如しと云う意味から名づけた菩薩である。大日如来の福智の二徳を本願としてゐるため、信ずれば罪障を消滅し、福德智恵を得る事が出来る。今でも入学試験の頃に記されることがある。

路は横道に入つたが、この山を見張所として展望すればすばらしい眺めである。正面は佐伯湾と望み、堅田平野の大部分を眼下に見おろす。本城前の物見台としてはいれ又最適の山である。

次は石槌山、高さ約二〇〇米、新熟野神社の横に登山口がある。急坂で一気に頂上まで登れる。石槌講の人達によつて、四圍の石槌神社が祀られている。この地も亦展望のきくところである。

この四ヶ所、居館とは互に指顧の内にあり、道は居館

より最短距離によつて結ばれ、どの山々も連絡を取り易から、一体となつて見張りの出来る好条件にある。更に居館背後の高城山に登らんか、南部一円の山々谷々は一望の内にあり、はるかに豊後水道をへたてて四圍の山々が望まれる。

居館に居ながらにして四ヶ所の見張所が見え、其の上高城山を背負ひ、二つの山城を持つといふ二重三重の構えは、先づ完璧の要塞と言えよう。以上のことから考へても、高城は佐伯氏居館の地と云えるのではあるまいか。私は更に、弘安岡田帳、佐伯大神氏系図等で見つけたいと思つてゐる。

民俗記録

井戸掘りの元祖 又井半治郎

会員 池田 田 作

古老の語によれば、私共の村地は稲作主体の農家が、早く、早魃の年などは植付にも困り、番匠川の土流土器屋から舟で水運び、湿田に育てた苗を田に植付けたり、ともあり、氏神様に雨乞いのおこもりがしばしばあり、二十三夜は降らねば曇るとひと雨を待った。旱天に曇電と見る言葉の通り、一途に雨を待ったものである。

そこで何時の頃であつたか、村は植付けに備えて堤を作つたが、此の水を自分勝手に使用する者があつた。いわゆる、我が田に水を引く欲水をして、多量の水をこつたり我が田に入れるわけである。

この悪習を根絶するため、い。番を設けて、堤の水の